

特別寄稿

知られざる理想の教育者 倉崎仁一郎 — 作家 川端康成の恩師 —



(松江市文化協会発行『湖都松江』第40号に掲載された同名作品に写真を追加して転載しました。)

押田 良樹 (11期)

■偶然の出会い

これから述べるのは、学問と学校と生徒をこよなく愛し、一切の名利を追わず恩師への報恩に徹し、生涯を中等教育に捧げ、そして、その突然の死は生徒たちの発意による「生徒葬」という前代未聞の美談をもたらした、一人の中学校教師の物語である。

七年前、筆者が近畿双松会(旧制松江中学、新制松江高校、松江北高の近畿地区同窓会)の会長を務めていたとき、熊本の尚絅大学助教(現在は茨城大学教育学部准教授に異動)で川端康成の研究者である宮崎尚子氏から、川端たちの年次の生徒に五年にわたって英語を教えた倉崎仁一郎という教師が、松江中学の出身であり、近畿双松会に倉崎に関する資料が保存されていないか問い合わせてきたのであった。

筆者は松江から関西に出て60年、吹田に住んで40年になるが、隣町茨木を終焉の地とした、この松江出身の人物に大いに興味を覚えた。以来、宮崎氏の研究のお手伝いをする中で、この倉崎仁一郎という人物に惹きつけられ、その全容解明に取り組んできた。

■生い立ち

倉崎仁一郎は明治元年(1868)2月1日、倉崎禮助、イネ(高見兵衛の娘)の次男として、北堀町新橋町で生まれた。倉崎家の屋号は足立屋だった。3歳上の金之助と13歳下の清との三人兄弟だった。

新橋町は、塩見縄手から内中原へと堀川沿いに通じる道の、新橋までの西側一帯で、江戸期の武家町である北堀町の中にある町人町だった。倉崎家は新橋のたもとに近い場所にあった。

倉崎は、明治8年1月、桜崎小学校(のち北堀小学校に改称)に入学し、12年5月に卒業、9月に松江中学に入学した。11歳と7か月の時である。この時、3歳上の金之助も同時に入学している。他には岸清一、奥村(のちに若槻)礼次郎、尾原亮太郎、山本庫次郎などもいた。学舎はそれまで和多見の善導寺の仮校舎にあったが、この年、殿町に新築されたばかりであった。

倉崎は、のち山庫さんと呼ばれて母校の名物教師となる、上記の山本庫次郎と生涯にわたっての親友となるが、二人は年少でもあり、当初は勉学が皆についていけず、一年後、当時の校長の指示で、一級下の生徒たちともう一度やり直すことになった。その後は二人とも急速に成績を伸ばし首席を争うほどになった。

二人は、ともに家庭の事情から上級学校への進学は諦め、明治17年7月に、新設の高等科に進み、19年7月に卒業した。倉崎は首席だった。一緒に入学した岸清一などより三年遅れたわけだが、この三年は、倉崎の英語、文学への学識の蓄積に役立つとともに、田所貢と加藤逢吉という、人生に大きな影響を受けることになる二人の恩師と出会い、伊原敏郎(青々園)、数藤斧三郎(五城)など

多くの年下の親しい友人を得る貴重な年月となった。

■二人の恩師との出会い 佐賀へそして茨木へ

明治19年7月松江中学卒業後、倉崎は数か月間、母校の化学教師加藤逢吉の助手を務めた。加藤は同年5月に宮城県師範学校から赴任してきて、松江中学と島根県師範学校の教諭を兼務したが、その年の12月には、滋賀県尋常師範学校に転出した。従って加藤が松江にいたのは僅かに半年余りに過ぎなかった。

九年後、倉崎は、再び加藤のもとで、終生の関係を持つことになるのだが、倉崎の経歴を時代順に紹介するため、それは後に記すことにする。

加藤が松江を去ったのち、倉崎は明治20年10月から松江高等小学校の訓導を務めた。高等小学校は設立されたばかりであり、教育も手探りの状態であった。倉崎は若年ながら教師間でリーダーシップを発揮し、同僚を誘って、女性宣教師パソエのもとに通って新約聖書により英語の指導を受け、また漢学の泰斗内村鱸香の塾に学ぶなどして、教師としての実力向上に努めた。



田所貢

明治16年1月～19年5月

松江中学第4代校長

明治23年佐賀中学校長就任、
倉崎を松江から呼び寄せる。

写真は松江北高校百年史より

明治23年3月、倉崎は思いがけず、中学時代の校長田所貢に招かれ、佐賀県尋常中学に赴任することになった。

田所貢は倉崎の中学時代後半三年間の校長であり、明治19年5月に高等師範学校教諭に転じていた。田所は生徒たちに尊敬される人格者であった。当時、岸清一を始め、松江中学を卒業し上京して上級学校を目指す者は、上京後まず田所のところを訪ねた。



加藤逢吉

明治19年5月～12月

松江中学教師を務める。

明治28年2月～大正10年4月
茨木中学の初代校長を務める。
開校にあたって佐賀中学から倉崎を呼び寄せる。

写真は茨木高校百年史より

田所は、明治23年初め佐賀県尋常中学校（現佐賀西高校）校長に赴任するとともに、かつて中学生であった当時から、その人柄・能力を認めていた倉崎を松江から呼び寄せた。

倉崎の友人西田千太郎は明治23年3月15日の日記に「松勢（原文のママ）水亭ニ於テ、佐賀県中学校ニ向テ出向セントスル倉崎仁一郎氏ノ為ニ開ケル送別会ニ出席ス。出席スルモノ凡四十名。」と記している。

しかし、田所はその年の11月に突如他界した。倉崎が師のもとにいたのは一年に満たず、恩に報いるにはあまりに短い期間だった。

そして、五年後の明治28年に到り、今度は、前述の松江中学時代の恩師、加藤逢吉が、新設の大府立第四尋常中学校（のち茨木中学、現在の茨木高校）の校長に就任するにあたって、倉崎を呼び寄せたのである。

加藤は、田所と同じように、松江時代のわずか数か月間、自分の助手を務めただけの倉崎の人物を高く評価しており、新設校の運営に自らの片腕と頼むべく、招いたのである。それ以来、二人は生涯の師弟関係を結び、大正6年1月に倉崎が世を去るまでの22年間その関係は続いた。

明治28年4月、27歳の倉崎は新婚の妻スエとともに茨木に赴任した。スエは松江市西津田の長谷川春水の娘であった。



明治28年4月
新婚時代の倉崎夫妻

■茨木中学の教師として

当時、大阪府の府立中学校は明治6年創立の大阪尋常中学校（現在の北野高校）のみであったが、明治28年2月に、堺、八尾、茨木に、大阪府第二、第三、第四尋常中学校が誕生した。現在の三国ヶ丘、八尾、茨木高校である。

加藤逢吉は高知県尋常中学（現高知追手前高校）から、大阪府第四尋常中学の初代校長として赴任した。加藤は「勤儉力行」の校訓と「質実剛健」の校風を定め、その率先垂範に努めた。

倉崎は歴史と英語を担当し、明治32年4月から二年半寄宿舎の舎監も務めた。また長く風紀監として生徒の指導に当たった。

倉崎の没後、大正7年に発行された、茨木中学の同窓会「久敬会」の臨時会報「故倉崎仁一郎先生追悼号」には数多くの卒業生、在校生、同僚教師、知人から追悼文が寄せられているが、それらを読むと倉崎の人間像が浮かび上がってくる。

倉崎は生徒たちに「クラっさん」と呼ばれた。それは、あだ名ではなく尊敬と親しみが込められた呼び名だった。「クラっさんが来た」と誰かが言えば、自然と皆の居ずまいを正させる威厳、それでいて慕わしく思わせる親しみやすさも併せ持つ、厳父であり慈父でもあった。体軀は若い頃は痩身だったが、年を追って肥満し、亡くなる前年の身体測定によると、現在でいうBMI指数は28であった。

服装には全く頓着せず、いつもよれよれの服を身に付け、何年も使ったメガネは曲がっていても気にしない様子だった。

出雲訛りの低音で話し、能弁ではなかったが無類の話好きだった。

生徒一人一人のことを家族のことも含めてよく知っており、病気がちの生徒には対処法を教え、不登校の問題生徒には自分の家から通わないかと提案するなど親身になって生徒のことを心配した。



末娘（四女）の敏と
大正5年頃

授業の仕方もユニークで、例えば、授業中あくびをした生徒を見つけてもただ叱るのではなく、英語で「あくび」を何というか、その用例などを示した。当の生徒は勿論のこと、生徒は皆その単

語、用例を自然と覚えて身に付くというようなやり方だった。

給料の大半を英語などの専門書に割くほど、研究熱心であり、英語に関しては深い学識を得ていた。ある教育誌に教育界の大御所である某博士が、当時の中学生の英語の学力が劣っているのは中学校の英語教育に問題があるのではないかという趣旨の意見を載せたことがあった。これに対して倉崎は「教育時論」誌上に数次に渡って博士の見解を「眼高粗漏」の説であるとして反論し、全国中学校の英語教師に快哉を叫ばせたこともあった。

そのような学識を買われ、開成館から五巻に渡る「ニュー・エデュケーション・リーダー」の編纂を委嘱された。

この教科書は、倉崎本人によって、川端康成たちの年次の生徒の授業に一年から五年まで使用された。川端は通学の電車内で他校の生徒がそれを手にしているのを見て誇らしく思ったと述懐している。

■川端康成の恩師

川端康成は明治45年に入学した。川端は満2歳までに両親を亡くし、9歳の時には離れて暮らしていた4歳上の姉も他界し、唯一の肉親となった父方の祖父と暮らしていたが、その祖父も川端が14歳の時亡くなった。

全くの孤児となった川端は、中学三年の終わりに寄宿舎に入った。

寄宿舎は川端にとって唯一の家となった。そういう川端にとって、倉崎は父のような存在に思えたであろう。

中学入学時は首席だったともいわれた川端だが、入学してからは、書店にツケがたまって苦境に立つほど、文学に耽溺するようになった。授業中も小説を読むなど、教科に身が入らず成績は下がる一方だった。しかし、英語だけは例外だった。川端の日記を読むと、倉崎の受け持つ英語だけは予習復習に熱心だった。そして、倉崎に褒められたことを素直に喜び、さらに褒められるためしっかり頑張ろうという意欲を示している。川端が卒業後、周囲の誰もが無理であろうと思った一高に合格し、東大の英文科に進んだのも、この英語の実力がものを言ったのだと思われる。



中学1年時の
川端康成

川端は、加藤元校長の依頼を受けて、昭和7年の「久敬会会報」に、倉崎の十七回忌に寄せる一文を載せており、その中で次のように書いている。

「私の長い学校生活で、倉崎先生ほど私に感銘の深い教師は一人もなく、倉崎先生に対するほど私がよい生徒であったことは一度もない。」

学識が高く人格者である倉崎には、上級学校からの招聘の話がいくつかあった。しかし、恩師への報恩に徹すると決めている倉崎には、もとより名利を迫る気持ちは全くなく、また、現在より幸福な境遇は望めないとして、すべて固辞した。

■生徒の肩に柩を載せて

川端たち五年生の卒業が二ヶ月先に迫っていた大正6年1月29日未明、倉崎は脳溢血で倒れそのまま帰らぬ人となった。

満 48 歳だった。突然の訃報に全校生徒の驚きと悲嘆は大きかった。

一年生の時から五年間、倉崎から毎日英語の教えを受けた川端たち 88 人の五年生はとりわけ大きい悲しみの中にあっただが、臨時の学年集会を開き、師への恩返しをどのような形で行えばよいかを話し合った。そして、自分たちで葬列の柩を担ごうということに決まり、教師たちもそれを許可した。

葬儀は 1 月 31 日午後、東本願寺茨木別院で行われた。当日、寒風の吹きすさぶ中、午後三時に出棺した。幡、提灯、生花、花環などすべてが、緋の着物に袴、脚絆、草履履きの生徒たちの手にあった。質実を校是とする茨木中学の制服は、当時ではもう珍しくなった和服だった。

そして恩師の柩は 30 名の生徒の肩に戴せられた。両側に交代の生徒 30 名が列を作った。川端は棺を担ぎたかったが体力が劣るので、提灯持ちを受け持ったという。



花環を掲げ持つ生徒たち

三町にも及ぶ長い葬列は倉崎家から茨木別院まで町中を、粛々と進んだ。

葬儀は、在校生に加え多くの卒業生、同僚、知人合わせて千人内外が参列し、悲しみの中に執り行われた。

葬儀に向け 29 日に松江を立った兄金之助とその長女は、折からの大雪のため浜坂で汽車が足止めに遭い、遠路釜石から来る長女夫妻も同じく到着が遅れ、いずれも到着は式当日の 31 日の深夜になる見込みとなった。二組の親族が最後のお別れができるよう、茶毘に付すのは翌 1 日に延ばし、柩はそのまま茨木別院に置き、五年生の生徒たちが恩師の亡骸を守って通夜をすることになった。

一旦身支度のため帰宅した生徒たちは、遠方の者や体の弱い者は来なくてもよいと言われたにもかかわらず、ほとんどが再び別院に集まった。夜を徹して、恩師の思い出を語り合い、寺院の生まれの生徒数名が読経をして朝を迎えた。前夜遅く茨木に着いた兄と姪、長女夫妻が来て、最後のお別れをした。

生徒たちは再び恩師の棺を担ぎ、町はずれの火葬場に向かった。

葬儀、通夜を経た翌日の 2 月 1 日の様子を、川端の三学年下の大宅壮一は日記にこう書いている。

「昨夜より、五年級の生徒は尽く御坊の本堂にて、先生の棺近く侍りて通夜をいたし候。昨日吹き込む寒風を厭わず来りて会葬せし多くの卒業生といい、先生の死し給いし後の五年生の振舞といい、親子よりも厚き、師弟の情けに世人は大いに感泣いたし居る由に候。」

川端はこの葬儀前後の様相を綴った文章を国漢の教師であり舎監でもある満井成吉に見せた。

『「エッー・ほんとうか？」信ずるにはあまりの驚愕であつた。否むには、あまりに友の顔が蒼ざめて居た。舎監室の満井先生の涙は更に此悲しむべき事實を信ずべく強いた。あゝ我敬愛惜く能はざる倉崎先生は 1 月 29 日の未明、多くの人々の驚きと悲しみの中に突如として逝かれたのであつた。」

満井は、このように始まる川端の文章を読んで感心し、茨木中学時代の同期生で、雑誌「団欒」を主宰している石丸梧平に送った。石丸は、恩師を慕う生徒たちの行いに感動し、「生徒の肩に柩を載せて」と題して「団欒」に掲載した。川端の、雑誌に掲載した最初の作品だった。川端はその一年前の日記に、既にノーベル賞への思いを書いている。小林一三のような実業家や教育界、宗教界の大家の中に中学生の文章が載ったのである。



川端の作品が初めて載った雑誌「団欒」。作品の存在は知られていたが、長年、雑誌の現物が見つからず「幻の作品」と言われていた。2012年、宮崎尚子氏が愛知県の本古書店で発見し大きく報道された。

小説家を目指す将来に、川端が大きな自信を得たことは十分想像される。そして、生徒葬という、純真な生徒たちの真心の発露に、川端はのちの作品にみられる独特の「美」の原点を見出したのではないかと、前述の宮崎尚子氏は指摘する。



キング誌の昭和2年3月号に掲載された「倉木先生の葬式」

川端は世に出た後も、同じモチーフで「キング」誌の昭和2年3月号に「倉木先生の葬儀」として、さらに「東光少年」誌の昭和24年5号に「師の棺を肩に」として、二度作品を発表している。(両作品は川端康成全集第十九巻 新潮社1981年に収録されている)

■半世紀後も続く追慕の念

茨木高校の同窓会である久敬会に、昭和41年9月に執り行われた倉崎の五十回忌と生物の教師小笠原利孝の四十二回忌の合同追悼法要を伝える会報号外が保存されている。多くの教え子が参列し盛大に執り行われた様子が分かる。



茨木高校同窓会「久敬会」が建立した墓。茨木市本願寺

没後50年を経て、教え子たちは師の享年をはるかに越え、80歳を超える者もいた。それらの教え子が師の思い出を語る貴重なテープも保存されている。

半世紀を経て、なお続く恩師への追慕の念に、師弟の絆の深さを感じる。

このように教え子から敬愛された理想の教師、倉崎仁一郎が松江の人であったことを誇りに思う。

<※編集注>倉崎仁一郎は旧制松江中学校7期